沖縄県立総合教育センター　前期長期研修　第１回検証授業

「自立活動」学習指導案

日　　時：平成29年5月31日（水）

　　　　　　１校時（9：00～9:45）

場　　所：自立活動室

対象児童：小学部4年

男子1名　　計1名

授 業 者：金城　哲

指導主事：島袋　美加

Ⅰ　研究テーマ　　重度・重複障害児の身体の動きを高める自立活動の工夫

－ムーブメント教育を活用した個別学習の授業実践を通して－

Ⅱ　研究仮説

　１　MEPA-R評定表によるアセスメントを使用する事で、児童の発達の状態が明確になるであろう。

　２　ムーブメント教育を活用した学習プログラムを作成し、個別の自立活動で授業実践を行う事で、

筋緊張が緩み、身体の動きが高まり、日常生活動作の改善につながるであろう。

Ⅲ　研究テーマとの関わり

肢体不自由を主とする重度・重複障害のある児童生徒は、日常生活や学習場面において、健康保持の為の呼吸、摂食、嚥下、学習に必要な姿勢保持と上肢の操作、コミュニケ―ションの為の発声や発語など様々な困難さを抱えている。

その重度・重複障害のある子どもの指導において大沼（2009）は、「聴覚、触覚、固有感覚、前庭感覚の４つの感覚が重度・重複障害のある子どもの教育において大きな役割を演じる」と述べている。

　　４つの感覚を高めていく手立てとして、小林(2006)は「ムーブメント教育・療法」を提唱している。

　ムーブメント教育・療法とは楽しく運動や動作をしながら、感覚の統合、身体意識や運動機能の拡大

　さらには、心理的諸機能などの発達を目指す教育である。ムーブメント教育を通じて、身体を知り、身体を巧みに使えるように学習し、意志伝達機能や認知機能を発達させ、自己の表現や情緒の成熟、社会性の発達を促進する。

　　このムーブメント教育を実施するにあたり、対象児童の実態を把握することや、指導の手がかりとするアセスメントとして「ＭＥＰＡ－Ｒ評定表」を使用する。「ＭＥＰＡ－Ｒ評定表」とは、運動技能、身体意識、心理的諸機能が今どこまで発達しているか、対象がすでに獲得している「動き」や「表現」などの行動の特徴は何かを把握し、それにより発達の手がかりを得る。この手がかりを基にムーブメント教育の支援プログラムを編成する。

　　そこで、本研究では、児童の実態に合わせた支援プログラムを、個別の自立活動の時間に設定し、取

り組む。個別の指導計画に支援プログラムを盛り込み、自立活動の６区分に反映させながら、児童の実態に合う目標と内容を設定していく。「ＭＥＰＡ－Ｒ評定表」で対象児童の姿勢、移動、技巧、受容言語、表出言語、社会性領域の発達を把握し、その落ち込みに焦点を当て、ムーブメント教育で身体各部位を刺激し発達を促し、身体の動きの向上を図って行きたいと考え本テーマを設定した。

　　以上のことから、この検証授業では、本校小学部４年生のＡ児を対象に「ＭＥＰＡ－Ｒ評定表」で評価した、発達段階を手がかりにした支援プログラムの活用が、適切かどうか検討したい。そして、週２回の自立活動でのムーブメント教育の実践を通して、身体の動きが高まるのかを検証する。

1. 児童観

本研究の対象となる児童は、小学部４年生の男児で、重複学級に在籍し「知的障害代替」の教育課程で学習を進めている。先天性水頭症による脳原性運動機能障害の診断を受け、てんかんを併せ有している。日常生活の場面においては、食事や排せつ、車いすでの移動など支援を必要とする。コミュニケーションにおいては、挨拶に対して、手でタッチしたり、その日の気分によって発音は不明瞭　だが「おはよう」と発声したりする。不快な時は「いや」「いたい」など発語で相手に伝える事ができ、機嫌の良い時は「な」の音で童謡を歌う様子が見られ、粗大運動を好みブランコやトランポリンなどの揺れを楽しむと笑顔が多く見られる。力が弱く、筋肉のこわばりがあり、背中は変形拘縮による側わんが見られる。両足首は内反し、安定した座位や身体の動きが限定されている。

1. 題材観

　　本題材で扱う「ゆらゆら揺れを楽しもう！」は、揺れる、動く、支えるなどの感覚を通して、自己

　の身体の動きを意識して、動きの拡大が期待できる。また、教師とのやりとりや触れ合いから、相手

　を意識し表情や発声を促し、受容言語や表出言語の拡大を図る。

　　「抱っこゆらゆら」では、椅子から畳への移乗の際に、本児の好きな抱っこで緊張をほぐし、快の

　状態を作る。その際に、体幹のひねりや伸展を行い、体幹のストレッチを行う。「バランスボールゆ

らゆら」では、バランスボールの上で仰向けの状態になり、ゆっくりと上下左右に揺らす事で体幹

の緊張緩和と伸展を促す。状態を見ながら、ボールを左右に傾けて、重力を感じて、体幹のひねりや寝返りを促す。リラックスと緊張の状態を交互に作り、遊びの感覚を取り入れながら本児が活動を楽しめるように工夫をする。「トランポリン」では、上下の揺れ（垂直バランス運動）を体感しながら、静的な状態では促されない抗重力の経験を取り入れ、身体の支持力を高める。

1. 指導観

　　重度・重複障害のある児童生徒は、障害により身体の動きづらさがあるため、学校生活の様々な場

　面において、障害の状態に応じた発達を促す事が必要である。「ムーブメント教育」は動きを促し、

　支援していく中で、自身の動きを知り、動きの拡大を図る事をねらう。また「ムーブメント教育」は

単に動きを高めるだけではなく、心理的諸機能を高めて、子どもたちの「健康と幸福感」の達成を大

きなねらいとしている。本時の自立活動の個別学習において、対象児童の体調や様子を担任と引き継

いで活動に取り組む状態を確認する。児童の目線で安心感を与えていけるように言葉かけや触れ合い

を心がけたい。また、車椅子のベルト解除や移乗の際は、腕や脚に引っかかりがないよう安全に配慮

をしていく。「バランスボール」や「トランポリン」「ブランコ」での活動においても、転倒や落下の

ないように気を配るようにする。その上で児童が活動の中で心地良い揺れや強弱のある揺れに対して

意欲的に反応して、楽しみながら身体の動きの拡大につながるようにしていきたいと考える。

Ⅳ　題材名　「ゆらゆら揺れを楽しもう！」

Ⅴ　題材の目標

1. 情緒を安定させて、活動に対して意欲的に学習に望む事ができる。
2. 教師の合図や言葉かけで、発声や身振り等のサインで応える事ができる。
3. 粗大運動を通して、身体の緊張を緩め、体幹の伸展や姿勢の保持ができる。

Ⅵ　指導計画　　総授業時数１３時間（週１～２時間）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 　　　　　　　　　題　材　 | 　　　　　　　　内　容 |
| １ | ゆらゆら揺れを楽しもう。 | 抱っこやバランスボール、トランポリンブランコ等の揺れを感じて、体幹の緊張緩和や上肢、下肢の伸展を図る。 |
| ２ | 体を支えてみよう。 | 揺れを感じながら緊張緩和、進展、体幹の支持、座位姿勢の保持 |

1. 本時の目標
	1. 揺れを感じながら、体幹を緩めたり伸展したりする事ができる。
	2. 教師の言葉かけに対して言葉や身振り等のサインで相手に気持ちを伝える事ができる。
2. 自立活動におけるＡ児の実態把握と指導内容

Ａ児の実態と指導内容を下記の図にまとめる。まず、自立活動の六つの区分（ア）に整理し、

そこから指導目標（イ）や具体的な指導内容（エ）と関連付けた。本研究では、主に「具体的

　　な指導内容」の①から④を基本としながら学習を進めて行くこととする。

（ア）

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 項目 | １ 健康の保持 | ２ 心理的な安定 | ３ 人間関係の形成 | ４ 環境の把握 | ５ 身体の動き | ６コミュニケーション |
| 実態把握 | ・てんかんを併せ有しているが、状態は安定している。暑い時や不快な時は泣いて訴える。 | ・抱っこやブランコ等の粗大運動を好む暗い場所が好きで毛布をかぶる仕草が見られる。 | ・呼びかけや合図に応じてずり這いで近づく事ができる。・不快な時は「いや」「いたい」等の発語で伝える。 | ・周囲の様子を見渡して注視する様子が見られる。 | ・筋肉のこわばりや緊張、背中に側わんが見られ安定した座位が困難。 | ・教師の促しに応じる事ができる。・発音は不明瞭だが自分の名前を言ったり挨拶したりする事ができる。 |

（イ）

|  |  |
| --- | --- |
| 指導目標 | 筋肉のこわばりや緊張を緩め座位保持と身体の動きの拡大を図る。 |

（ウ）

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 自立活動における項目 | 1 健康の保持 | ２ 心理的な安定 | ３ 人間関係の形成 | ４ 環境の把握 | ５ 身体の動き | ６ コミュニケーション |
| 1. 生活の

リズムや生活習慣の形成に関する事。 | (1)情緒の安定に関すること。(2)状況の理解と変化への対応に関する事。 | (1)他者との関わりの基礎に関する事。(3)自己の理解と行動の調整に関する事。 | (1)保有する感覚の活用に関する事。(2)感覚や認知の特性への対応に関する事。 | 1. 姿勢と運動

動作の基本的技能に関する事。1. 姿勢保持と

運動・動作の補助的手段の活用に関する事。1. 日常生活に

必要な基本動作に関する事(4)身体の移動能力に関する事 | (1)コミュニケーションの基礎的能力に関する事(2)言語の受容と表出に関する事 |

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 具体的な指導内容 | 1. 本児の好きな粗大

運動を取り入れ情緒の安定を図る。 | 1. 抱っこや触れ合い

を通して、他者を意識して関わりが持てるようにする。 | 1. 粗大運動を通して

筋緊張の緩和、身体の伸展、体幹の支持や姿勢保持を行う。 | 1. 教師とのやりとり

を通して、発語や身振り等のサインで相手に気持ちや要求を伝える |

（エ）

|  |
| --- |
| 　　　　　　　　　　　　　　児童の実態と個別目標及び評価　　　　　　　　　　　　　　　　評価：◎できた　　ややできた○　　☆難しい（改善点） |
| 氏　名 | 本時に関する児童の実態 | 　　　　　　本時の目標 | 評価 |
| 　　Ａ | ・てんかんを併せ有しているが、　体調は安定している。・抱っこや揺れ遊びが好きで　快の状態の時は笑ったり、「な」音で歌ったりする。・足裏に過敏があり、床に付ける　事には抵抗が見られる。・筋力が弱く、筋緊張や側わんが　あり、一定時間の座位が困難　である。・不快な時は、「いや」「いたい」 の発語で相手に伝える事ができ　る。・呼びかけや合図に応じてずり這　いで移動する事ができる。 | ・揺れを感じながら、体幹を緩めたり　伸展したりする事ができる。 |  |
| ・教師の合図や促しで言葉や身振り等の　サインで相手に気持ちを伝える事がで　きる。 |  |

1. 教室配置及び教材・教具
	1. 教材・教具

マット、バランスボール、トランポリン、ホーススウィング、箱型ブランコ、ＣＤ、ラジカセ

* 1. 配置図（自立活動室）

棚

棚

箱型ブランコ

ホーススウィング

マット

ラジカセ

出入口

出入口

1. 本時の展開

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 時間 | 学習内容と児童の活動 | 教師の支援及び留意点 | 備　考 |
| 導入9:009:05 | 1朝のあいさつ 2健康観察、今日の学習の　確認3車椅子からの移乗。 | ・本児と向かい合いながら、言葉かけを行い、言葉や身振りで挨拶を促す。・健康状態の確認（担任との引継ぎ、顔色や様　子を観察する）・カードを提示しながら、今日の学習を説明する。・胸ベルト解除と教師の側への体位移動を　促す。 | 写真カード |
| 展開9:109:209:259:309:35 | 4「抱っこゆらゆら」5「バランスボール」6「トランポリン」7休　憩8「ホーススウィング」9「箱型ブランコ」 | ・身体を密着させて、言葉かけを行いながら左右にゆっくりと揺らしながら、体幹の伸展　ひねりを取り入れる。・バランスボールに仰向けで横になる。腰を支えながら左右上下にゆっくり揺らす。・体幹や股関節緩め、体幹や下肢の伸展を促す・途中でうつ伏せ姿勢にして、膝の伸展、可動域拡大を促す。・座位姿勢で教師が後方から支援して揺らす。上肢は前方に付き体幹の支持を促す。・ゆっくりと徐々に左右の揺れなど強弱を　つける。・マットに仰向けになりリラックスをする。・補装具を履き、次への活動の準備をする。・教師は後方から支援を行いゆっくりと前後　左右に揺らす。足裏は床に付くように支援　を行う。・座位姿勢で上肢は手すりを握り、左右前後の　揺れを感じる。体幹や上肢の支持を促す。 | 補装具 |
| まとめ9:409:43 | 10車椅子へ移動11振り返り12終わりの挨拶 | ・車椅子までずり這いで移動する。・写真カードを提示して今日の学習を振り返　る。・教師の号令に発語や身振りで応えるようにする。 | 写真カード |

（５）授業の評価

　　　別紙「特別支援教育成果評価尺度（ＳＮＥＡＴ）」参照

（６）検証

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 検証項目 | 検証の方法 | 結　　果 |
| 「ＭＥＰＡ－Ｒ」評定表で児童の実態を把握することができるか | ・事前に自立活動前担当や現担任と評定表を基に実態把握をしたり、普段の活動において検査項目に沿って確認をする。 |  |
| 児童の課題に合わせた授業プログラムを作成する事ができているか。 | ・ＭＥＰＡ―Ｒ評定表からつまづいている動きを抽出し、その課題に沿ったムーブメントプログラムを作成する。 |  |
| 授業において目標を意識して指導することができたか。 | ・授業後の反省、評価 |  |
| 「ムーブメント教育」は児童の身体の動きが高まる学習として有効であったか | ・児童の活動の様子から考察する。・ＭＥＰＡ－Ｒ評定表で再度検査を行い発達の変化を確認する。 |  |
| 児童はどのように活動に対して反応（表現）を示していたのか。 | ・授業者の反省、・ＶＴＲ |  |
| 児童の反応（表現）に教師はどのように対応していたのか。 | ・授業者の反省・ＶＴＲ | 　 |